

も一晩で失礼するつもりでしたが、せめてもう一晩私だけでも泊まるようにと御夫妻のおすすめで私は残ることになりました。

船着場に夫を見送った後、ご夫妻と小高いすすき山に登りました。草原に坐つて奥様お手作りのおにぎりをいただきいますと、麓からトラクターの音が近づいて近くで止まりました。そして一人村の方が降りて来られました。その方は先生のお知り合いで、牛の冬の飼料を刈る為に来られた方でした。一緒ににおにぎりをいただきながら先生の青汁のお話しがはじまりました。先生は熱心に青汁の効用を説かれ「一度飲んで見ませんか」とすすめておられましたが、近い中に苗をもらいに先生のお宅を訪ねられることとなりました。

もう一晩泊めていただき、翌朝、お庭のすすきを三株記念にいただき、先生ご夫妻に佐世保までお送りいただいて私は京都に帰りました。この旅が夫との唯一の旅で生涯の思い出となりました。

藤松先生は、昭和六十三年秋、九十五歳で亡くなられましたが、夫は「義央さんは百歳は楽に越えられるはずだったのに。」とくりかえし残念がっております。

夫は四十八歳ではじめて「父」になった人で、とても子供達をいつくしみました。長男が三歳の頃、夫が講演の旅から久しぶりに家に帰りますと、長男はよろこんで一時も父のそばを離れません。父が本校の事務室まで行くのにも後を追って泣き、父はいつも抱いて行きました。門衛のおばさんは、「この